

思考力・判断力・表現力等の育成を目指す 評価方法の開発と授業づくり

1. 研究目的

本コロキウムの目的は、2008年告示の新学習指導要領で強調されている思考力・判断力・表現力等の育成を目指す評価方法を探究することである。これらの学力を授業において効果的に育成するためには、それらを子どもがどれだけ獲得しているかをみとり、指導の改善に生かしていく必要がある。したがって思考力・判断力・表現力等の育成に際しては、知識の量を測定する評価方法とは異なった、これらの学力の質に応じた評価方法の開発が不可欠であるといえる。

2. 活動の概要

本コロキウムの中心である教育方法学講座（教育方法分野）の大学院生は、2003年度より京都市立高倉小学校との連携による共同授業研究を進め、教材研究・授業計画から実施・評価に至る実際の授業づくりに関わってきた。このフィールド研究の経験と知見を生かして、2006年度から「研究開発コロキウム」において研究を行ってきた。2006年度は共同授業研究の中で院生と学校教師の双方にもたらされた成果を可視化し、2007年度は総合学習に関する授業研究の方法論の特徴を抽出し、2008年度は一貫教育カリキュラムの下で授業づくりを行う意義と課題を明らかにした。

本年度はこれらの授業づくりに関する研究実績を踏まえながら、算数の思考力・判断力・表現力等の評価方法に焦点をあてた取り組みを進めた。具体的には、実際の授業づくりに役立てることを考慮し、次の二つの検討を行った。

①算数の学習指導要領・教科書と数学教育協議会との比較

思考力・判断力・表現力等の評価方法に関する論文を読み合わせ、検討の視点を次の3点に整理した。(1)算数の本質としてどのような学力を想定しているか、(2)それが授業場面でどのように表れているか、(3) (1)の学力の評価方法、である。この視点に基づいて、学習指導要領と教科書に表れた算数教育の歴史的変遷（重視されていた教育目標や評価の観点、カリキュラムの構成原理など）、及び算数の教科書と指導書における指導方法を分析した。そしてこの学習指導要領と教科書にみる理論・実践と比較するために、数学教育協議会の理論と実践を分析した。まず同会の歴史とともに、創設者の一人である遠山啓の理論（学力・評価論、教材論）を検討した。さらに現代の実践の特徴として、式における単位の使用やシェーマ、生活とのつながりを取り出した。

②学校での実践検討

まず先行研究を通して、授業分析の方法論を学んだ。この方法論を参考に、全国の様々な学校の公開研究会に参加し、実際の授業づくりにおける思考力・表現力・判断力等の捉え方やその評価方法等を検討した。

3. 活動の成果と課題

2の活動により、実践現場の思考力・判断力・表現力等の評価方法を規定している観点として、次の2点を抽出できた。

①思考力・判断力・表現力等の相互関係

相互関係の捉え方には、思考力・判断力・表現力を並列関係で捉えるものと、表現力と判断力が思考力に含まれるなどの包含関係で捉えるものがある。前者の捉え方では、各学力を個別に評価する方法が取られていた。この分析的な評価方法では、評価の正確さは増すものの煩雑となり、評価の結果を指導の改善に生かすことが難しくなる。他方、後者の捉え方では、包括的な学力の習得度によって、包摂されている学力の習得度もみとられていた。この総合的な評価方法では、評価が簡潔で指導の改善に反映しやすい一方、各学力の評価の正確さに欠ける恐れがあるといえよう。

②思考力・判断力・表現力等と各教科で育成すべき学力との関係

思考力・判断力・表現力等をどの程度一般的な学力として捉えるかは、学校によって異なる。その一般性の度合いによって、評価の時期は下記のように定められていた。

- (1) 各単元の教科内容と結びついた学力（狭）
→各単元末など短期間で評価する。
- (2) 各教科の諸単元をまたがった学力
→学年末など中期間で評価する。
- (3) 通教科的な学力（広）
→数学年単位など長期間で評価する。

(3)の学力を1教科・短期間で評価すると妥当性に欠けるなどの問題が起こる。そのため評価の時期は、思考力・判断力・表現力の一般性の度合いを考慮して定める必要がある。

この二つの観点についてどのように考えているかという学力観に応じて、思考力・判断力・表現力等の評価方法は異なる。今後は引き続き思考力・判断力・表現力等の捉え方やその評価方法に関する理論と実践を検討し、この学力観と評価方法との関係を精緻化する。これにより、授業づくりに有益な思考力・判断力・表現力等の評価方法への示唆を得たい。



図1 授業の様子（研究分担者と研究協力者）

（文責：細尾 萌子）